

織姫さんと呼ばれて



浅草から列車で4時間余り、終点の会津田島駅からは車で舟鼻峠を越え、昭和村へと入っていく。初夏のまばゆい緑に包まれて、こんなにきれいなところがあるのかと信じられない気持ちだった。真っ白に映えるのはマタタビの葉だと、出迎えてくれた村の「お父さん」が教えてくれた。

私たち織姫1期生は、ホームステイだった。一人ずつ民家に泊まり、村の人と寝食を共にする。都会から来た娘を一年近く預かるということがどれほど大変なことか、当時の私にはわからなかった。見るもの聞くことすべてが新鮮ではしゃいでいたし、どこへ行っても「織姫さん」

と親しく迎えらるることに甘えていたのだと思う。ときには、「都会ならいいかもしれないが、ここではそれは通らないよ」と伝えられ、窮屈さを感じることもあった。だが、村での暮らしはこういうものだときちんと教えていただけたことが、のちにここで暮らすようになる私には何よりの宝となったことをありがたく思う。

毎朝、仲間たちと仕事場に集まり、夕方までからむしの糸を績む。先生は村のおばあちゃんたちだ。

「平らな気持ちでないと平らな糸はできないんだよ」

「一寸の糸も無駄にしちゃだめだ」

ばあちゃんたちの言葉を聴き、ひたすら手を動かす時間が、糸のように少しずつ積み重なりながら、やすらかな居場所となっていた。

夏、からむしの収穫が始まった。人の背丈を超え、まっすぐに育ったからむしを一本一本刈り取り、茎から韌皮を剥ぐまでの一連の手作業を習う。さらに皮を引き、繊維を取り出す「苧引き」の仕事では、あねさまたちの熟練の技に目を瞠った。青々としたからむしから現れる真珠のような原麻げんまの輝き。清々しい草の匂い。毎日、生まれたてのからむしに夢中で触れているうちに、短い夏は過ぎていった。

村に来て数か月、私はもう東京に帰ることを考えなくなっていた。鮮やかな季節の移ろいにゆだねるように、自然と共に生きられるこの村にもっといたい。

やがて赤や黄に染まった山々が初雪をいただき、長い冬の到来を知らせるころには、昭和村に移住しようと決めていた。